史料室だより No. 30 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1988年3月1日

特集・小学部新校舎建設事情

新築移転当時を回想して

――小学部新校舎35年前のおぼえ書――

元小学部部長　外　崎　長三郎

はじめに

小学部が現校舎に移って早くも35年の歳月が流れた。早いものである。その当事者であり同時に責任者でもあった私が、存命中に当時のいろいろな情況や経緯等についていささかでも誌しておくことが、将来に何かの参考になればと思い、一面また義務でさえあると感じ、乞われるままに薄れた記憶を呼び起こしながらペンをとることにした。そうは申しても、とりわけ数字上のことに関しては今手元に資料の持ち合わせもないので、正確を欠くことをおゆるし願いたい。

I　校舎新築移転を必要とした理由

① 6・3制への対応のために

敗戦を迎えた昭和20年8月15日後の日本は、連合軍の占領によって国政が支配されることになったので、国の機構や制度に一大変革がはじまった。それが教育の場合6か年義務制が9か年に延長され、いわゆる教育6・3制に変更されたのである。

諸施設の破壊に加えて物資欠乏に喘いでいた国内はいずこも同様であったにせよ、とりわけ激しい空襲に見舞われた東京の場合は、これまでの義務教育復旧だけでも手に負えない情況であったのに、更に新制の中学校まで増設となると、ますます手に負えない情況であった。

東洋英和の場合、幸い焼失は免れたものの、これまでの中等教育5年制が6年制に変わったようなものであるから、早晩収容力を欠くことになる。従って、同一校舎を共用していたために新制6・3・3部の中の何れの部門のための増築をはかるか、他に地所を求めて収容施設を造らなければならないことになった。

事は急を要するのに、議決機関である理事会も戦中戦後の混乱の際とて容易に機能発揮も期待できない情態にあった。特に院長職にあった方が軍籍にあったせいもあって活動し難い側面もあったことなどから、学校運営は専ら女学校教頭職にあった長野氏が院長代行をしておられたので、おのずと長野氏と私が中心にならざるを得なかった。従って極めて重大な6・3制への転換期対応も2人が解決に当たることになったのであった。

この件について両名が再三協議の末、「それでは小学部が他に地所を求めて転出することが一番

適当と思う」と決断したことで方向が定まったのである。もとより、当時の清水理事長はじめ全理事の承認を得るために、長野院長代行の奔走で決まり、実行に移すことになったのである。

②志望者急増による学級増設の緊急性

敗戦がミッションスクール生徒の激増を招来するようになったことは皮肉と言えば皮肉でもある。戦中は敵愾心を煽ることが国是のようなもので、米英憎しの感情醸成につとめた〝神国日本〟は、「英語」は敵性語として排斥し、校名も英和から永和への変更を余儀なくされたものが、敗戦降伏によって敵国であった米国を主体とする進駐軍占領により、教育の方向も全く逆になった。あれほど日本が軽蔑した敵国語が一転して「これからは英語でなければ……」とされ、そしてまた外国の宗教として排斥してきたキリスト教が「これからはキリスト教でなければ……」とにわか信者が殖えた影響などから、〝敵性国〟である外人の設立になる東洋英和に志願者が殺到するという現象に変わっていったのであった。

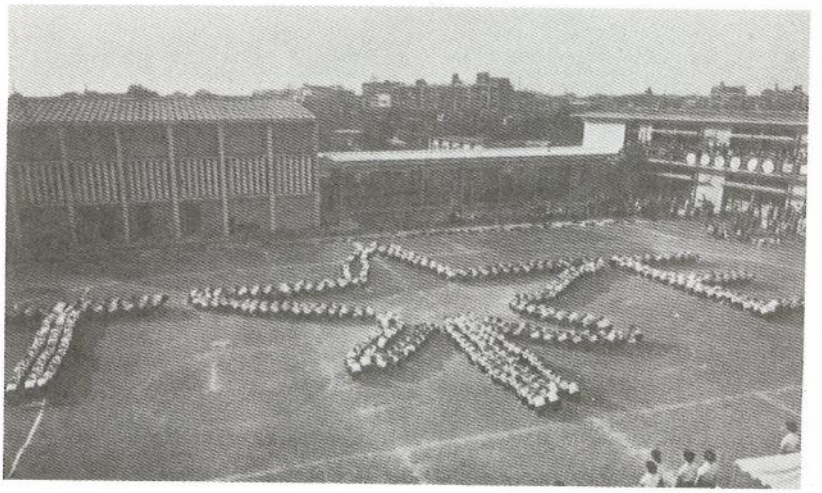
こんなことから1クラス30人の少数教育を堅持してきた小学部も、35人どころではなく、たちまち40人が45人となり、遂に50人以上が恒常化するまでに至った。これでは堪らない。最早教室の収容力も限度を超えてしまった。せめて各学年2クラスは欲しいものである。専科教師を採用するにしても2学級制が経済的にも有利である。とに角2学級制にして1クラス40人乃至45人にという念願を抱かざるを得なかった。

6・3新制対応の必要性をあえて客観的理由と称するなら、志望激増への対応の必要性を主観的理由と称してもよいかも知れない。

③それまでの小学部の実情

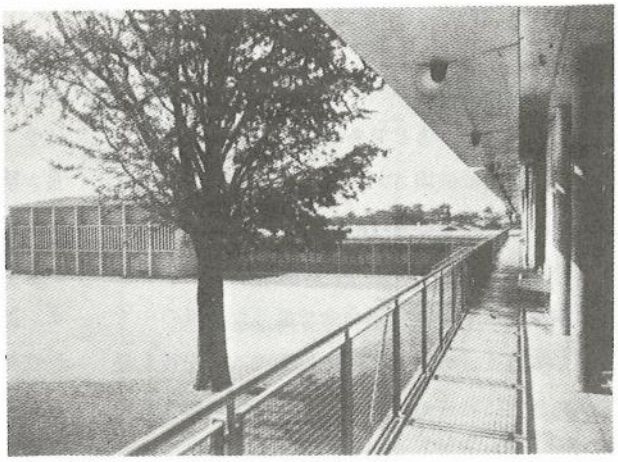
なんと言っても体育施設の貧困である。昭和8年新築の旧校舎はボーリスさんの設計で、当時東洋一を誇った堂々たる建物。その体育館もまた一流のものと言えたと思う。ざんねんなことに、それが女学校（通称女学科）と共通なために、お互い隔日使用のきまりになっていた。女の子といえども遊び盛り、天気のよい日はなんとか屋外に追いやって遊ばせるにしても、雨天の日など全く困った。「つり縄」などは子どもの興味を引くものだから、女学校使用日にも拘らず潜行するものが後を絶たない。「またもあの子が女学校の職員室に連れて行かれた」「お姉ちゃんたちに追い返された」などの苦情は一向になくならなかった。外庭といっても、校舎の横側に遊具として、滑り台とブランコ、ジャングルジムていどのものがあるだけであった。成長期の子どもたちを預っている学校として、それは申し訳がない。

そのほか女学校と共用の特別教室がいくつもあったが、満足に使用したことはいく度もないよう



創立70周年記念運動会

であった。音楽室は立派に設けてあるが、階段や廊下を通っての往復は厄介なことである。多くの場合ピアノのある小講堂が音楽の授業に当てられた。理科室も然り。美術は工作を兼ねた荒面机の教室で。習字もその通り。図書室にいたっては極小スペースの部屋で、1クラス全員収容などとても不可能である。読書指導などと言えるすじ合いではない。要するに校舎全体は女学校主体で、小学部（附属初等学校・通称小学科）は文字通り従属のかたちになっていたと言ったら失礼かも知れないが、小学部から眺めた場合その感を強くした。



新校舎バルコニーより体育館を望む

それらにも増して、いつも困惑したことは教師の兼務である。外見上は、女学校と小学部の融和をはかることは、英和の一貫教育として欠かせない教育上の要素であったことは言うまでもないが、この面もまた、どうしても女学校に比重が傾く。英語・音楽・理科・美術と、教科の教師たちの出勤は凡て女学校である。英語・音楽の2科だけは戦後小学部専任教師に変えていったものの、戦前の遠足・見学・農場行きなど、校外行事のある日はきまって小学部の授業がおきざりにされたものである。

こうしてみると、施設自体の不備と専科教師の運用面での欠陥の現状は、この際どうしても打破して新教育に立ち向かおうという決意をいよいよ強くしたのであった。

Ⅱ．現校地以前のもう一つの校地入手と建設案

現校地以前にすでに別の候補地を入手して、そこに小学部校舎新築の素案があったことを記しておきたい。

その土地とは今の六本木5丁目16で、現に最も近代的なマンション（麻布テラス）が建っている渡辺氏（三和銀行名誉会長）所有の土地のことである。

それまでは三井家所有の1,200坪（と記憶している）、これが空襲で建物が焼失して更地になっていた。とは言っても、敷地南側が崖のある見事な庭園である。勧める人があって買収にかかったのであるが、実は他にもっと大きな候補地があることを、ある父兄の方が知らせてくれたので、その交渉を先にしたことであった。それは元の「永坂さらしな」そばの背後に当たる高台になっている広大な土地で、これも三井家所有のものであった。今は大きな高速道路になっているが、永坂通りを越えたところ、石橋家の隣接地で恐らく5～6千坪もあったのではなかろうか。これの交渉に訪れたのであったが、「実は昨夜買い手があったので、その方に決まった。」と番頭さんのような方の返答であった。がっかりして退去したのである。さて、それを勧めてくれた父兄の方が、それではと言って名指ししてくれた土地は、前記の英和と斜交の、やはり三井家所有の現渡辺氏邸であった。

このようなことは、今日の時勢では到底考えられないことばかりで、第一そんな不動産売買に私の如き者と長野氏とが当たったことは、冒険とも無謀とも言うべきことであった。ことほどさように、こなごなに破壊された東京で、持ち主不明の土地があちらにもこちらにもあるといった当時のことである。かてて加えて、財閥解体とか資本の集中排除とかで、占領軍命令で混沌たる世の中であってみれば、大財閥は財産処理のことで夜も昼も眠られないほどのあわただしさであったであろうから、今日のような土地値上がりの時代とは凡てにおいて天と地のちがいがあったと思う。盲目に等しいような素人が土地の売買に走りまわってもおかしくない時代であったのである。とに角、今の中学部東端十字路斜交の土手は入手することになった。金額も当時（昭和25～26年頃）のお金で200万円であったと記憶している。そしてこの資金をどのようにして調達したかは私には記憶がない。何はともあれ当時の英和の後援会長であった一万田尚登氏が日本銀行総裁であった。全国の銀行行政を一手に握っておられただけに〝法王〟のニックネームがつけられていた当時のことであるから、万事につけて強みがあったことは事実である。

とに角こうして土地が手に入ったので、急いで新校舎建設の基本設計が進められたのである。とは申しても移転理由の一つである「学級増」の問題は望むべくもない。肝心の条件がみたされず、そのことが不可能ならば、せめて次の２点で特色づけようと決心したのである。

1.日本一の庭園を持った学校造りをしてみよう。

2.運動場は中高と共用でよいが、そのために斜交の歩道橋を設置しよう。（註＝現中学部校舎の辺は広い運動場であった。）

そんなことを夢に描いて設計事務所に依頼をし、一応の試案を得たのであった。この試案をあまり練らないまま進展を見ないでいるうちに、突如起こったことは現校地の出現である。

Ⅲ. 現校地獲得の経緯と基本方針

①現校地入手のいきさつ

そうこうしているうちに、思いもよらない〝うまい話〟が飛び込んできた。それも、ほかならぬ〝法王〟一万田氏からもたらされた一件である。宮内庁（実際は関東財務局所管）の東久邇邸跡地を売るとの情報である。確かめたところ、裏の崖地を含めて3000坪と分かり、欣喜雀躍とはこのことか、位置・環境・広さ等も申し分なし。是非入手したいとの熱望から、後援会長一万田氏が接衝の末、当時の価格でたしか3000万円(と記憶している)。昭和26年の頃かと思う。

②建設の基本的な方針

当時コンクリート塀の内部に幾つかの宮内庁職員住宅が残っていたが、２～３年後にはその残部も学校が入手した。今日の幼稚園が占めている敷地がそれであった。今の音楽室あたりに、焼失を免れた白壁の土蔵と、現管理棟あたりに、大きな日本家屋が残っていて、それが東久邇邸であった。春陽輝き陽炎立ち上る芝生に足を伸ばして陶然としたことも昨日の如くに甦ってくる。〝構想〟よりも〝夢想〟が先に立って仕方なかった。前庭の樹木の茂みや、そっちこっちに残っている楠の大木、そして今の食堂の辺にあった趣のある小池から聞こえてくる蛙の鳴き声 ― 夢に誘うような環境であった。日曜日ごとに、天気さえよければ教会学校のジュニア組（高校生）を引きつれてきて池のほとりで過ごしたものである。

さて、それではこの敷地にどのような校舎を建設すればよいのか。玄関をどこに定めるか。特別教室をどこに持っていくか。図書室、職員室、保

健室、会議室等々とめどもなくそれからそれへと想が走ったが、結局基本的な方針として次の4点に帰着した。

1.小学校の場合1階建てを理想とするが、生徒500人を想定する場合は不可能であっても、2階以上の重層建築は避けるようにする。
2.礼拝用の講堂と生徒・教師の交流の場である食堂の2つは必ず設置する。
3.屋外運動場はコンクリート固めにしないで、あくまで土面のままにしておく。
4.玄関前の樹木と中庭を彩る銀杏の大木とはそのまま生かしておく。

そのほかに数え上げればいくつもあるが上に止めておく。

Ⅳ. 資金集めと学内の反応

こうした小学部の企画に対して、学内（といっても主に中高）の反応はどうであったろうか。必ずしも芳しいものばかりではなかった。それは膨大な経費である。土地資金に次ぐ建設資金の募金である。戦後、小中高何れかの部が〝分家〟しなければならなくなった。小学部が分家するとの方針から出発したものであるが、いつの間にかそのことも棚に上げて〝お金〟だけが目に映ってくる。人情として当然といえば当然のことでもあるが。「小学部募金は天文学的数字である」など、雑音があまりに多く聞こえてくるものだから、ある日職員会議に乗り込んで説明をし、質問に答えてもらうこともあった。その天文学的数字も、天下の一万田〝法王〟の前では僅少すぎる数字でしかなかった。寄附集めのことで長野氏と2人で日銀を訪ねた時の問答。

「寄附はいくら集めればいいのか」「7000万円です」「ああ、たったそれだけか」―

それとこれとでは天地の開きがあった。当時あるカトリックの大学を造るための募金委員長でもあった一万田氏から見ると、そちらの方は億単位でご自身の娘や孫が入学した学校がこの程度の募金ときているから、その少なさを嘆いた心境も理解できる。

Ⅴ. トピックス二題

①設計者に人を得たこと

大江宏氏が設計に当たってくれたが、同氏は法政大学の教授として、すでに斬新な近代建築の設計家として高く評価されておられる方で、法政大学校舎を次々に設計されて来られた。そして教育と校舎に対して絶えず夢を抱いておられることに共感を覚えたのである。基本設計の段階で、前述したような私どもの意向の一つ一つを誠実に検討した上、実現に努力してくれたのであった。

とくに、クラスルームは閉鎖的なものであってはならないとし、自然をとり入れた広がりを持ったものとの方針のもとに、校庭に面したドアや窓にはガラスを多用したのが特徴である。教室と廊下との境界に鉄柱を使わず、堅いコンクリートの鉄線壁の工法や、とりわけコンクリートの打ちっぱなし、その他の新しい試みがいろいろなされたようである。

竣工当時の建築雑誌を賑わしたことはもとより、見学者も後を絶たなかった。占領下にあった昭和27～28年の頃であったから無理もない。後日私立小学校新増築等の場合、とくに講堂・食堂等について数校が参考にしたようである。その意味で、小学部は先導的役割を果たしたものと言ってよいと思う。

②ひょうたんから駒が出た話

体育館と講堂（地下食堂を含む）の2棟については、資金の関係で2期工事に回す計画になっていたものであった。しかし、いくらなんでも、せ

めて体育館だけはバラック建てでもよいから２期工事に回して欲しくないと、理事会や後援会にはかって強引に造ってもらったものであった。粗末な仕上がりになっているのもそのためである。しかしその体育館でも、講堂が建設されるまでの数年間は、礼拝をはじめとする多くの集会で立派に役立ったものである。

昭和29年の１月から新校舎に移ってまたたく間に３～４年が経過したころ、２期工事の講堂の件で資金繰りのこともあるので、後援会役員（小学部）に非公式に下相談を持ちかけた時のことである。協議が進むなかで突然ある役員から、「軽井沢に夏期学校用建物のために土地を持っているそうではないか。一体そこにいつ頃建てる予定になっているのか。」との予期しない質問が飛び出した。答弁が終わらないうちに「経費はいくらかかるのか」とたたみかけられた。それはしかじかであるが「講堂を第一に考えたい」のでと答えたが納まらなくなってしまった。

とどのつまりは、「そんな少額ですむなら、みんなで努力して資金を何とかしようではないか。」「私の娘が現在５年生だから、娘が卒業する前に仕上げて欲しいものだ。」― 率直な意見や金額の小さいことなどから一同賛意表明で、またたく間に「追分寮」が生まれることになってしまった。「ひょうたんから駒が生まれる」との譬えは、正にこんなことを言ったものだろうと私がしばしば話のひき合いに出すような一件であった。

正直言うと、その頃夏期学校開設の度毎に、東山荘の奪い合いや中軽井沢星野温泉行きとかで苦労のしっ放しであったから、たいへんな〝儲けもの〟にあずかったと感謝この上もなかったし、もとより講堂建設もそのことで遅延することもなく、予定通り完成しているから感謝この上なしであった。そして講堂の献堂式も追分寮の落成式も共に35年５月に行ない、祝賀の会を催すことができたのであった。

（昭和16年１月－42年３月在職、84才）

新校舎での１年間

甲　野　恵　美

私は６年生の１年間だけ新校舎で学び新校舎での最初の卒業生となりました。

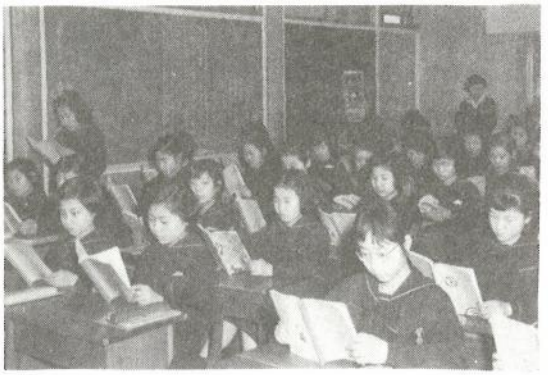
「何と明るい校舎だろう。」これが新校舎を見ての第一印象でした。打ちっ放しのコンクリートの薄い灰色に広く開いた窓。旧校舎では、小学部は、校庭に面した校舎の一角と小講堂とキャフテリアだけが生活の場で、「ここから先は行ってはいけません。」という場所が多く、濃い茶色を基調にした校舎は暗い感じで威圧的でした。もっともこれは新校舎に移ってみて初めて感じたことなのですが。中高生に対する遠慮の気持ちも無意識に働いていたのかもしれません。全部自分たちだけで使えるのだ、立入り禁止の秘密の場所はないのだということだけでも新校舎は明るく開放的でした。玄関を入るとだいだい色の校庭が広がり西側の特別教室はずっと遠くに見えました。自分が小さかったせいか、喜びの気持ちからか、校庭は本当に広く感じました。教室の南側は上から下までガラスでテラスからは直接校庭に出られます。ルーバーという聞き慣れない物がつき採光を調節するこ

とができました。斬新な設計ということで見学者が多いと聞いて自分たちの校舎に対する誇りを一層大きくしたものです。

新校舎建設に伴いそれまで単学級だったのが2学級編成になり、1年から5年まで各学年に編入生が入り先生も倍になり急に活気付きました。独立した小学部の最上級生として私たちは張り切って生活しました。それはまたとても忙しい1年間でもありました。

引っ越しのとき細々とした物を運ぶのは私たちの役でした。中高部から小学部まで一定の間隔に並びリレーしながら運びました。あの道にずらっと並んだ様子は今思い出しても愉快です。きっと当時も楽しみながら働いたのでしょう。当時は講堂と食堂はなく、礼拝や全校集会は今の体育館で行われました。ベンチを並べたり片付けたりするのも6年生の仕事でした。またホステスとして1年生から4年生までの教室に行き給食の世話もしました。西校舎の一番はじの給食室から食器や食缶を運ぶのは大変でした。給食で思い出すのはおやつです。放課後6年生にはおやつが出ました。「よく仕事をしてくれましたね。」という意味がこめられていたのでしょう。給食の残りのパンにジャムやバターを付けただけの物でしたが、そのおいしかったこと、忘れられません。

この年は創立70周年に当たってもいました。青年館で行われた全学院音楽会では小学部を代表して6年生がハイドンの「おもちゃのシンフォニー」を演奏しました。練習に次ぐ練習。放課後は例のおやつを食べながらの練習でした。この時ヴァイオリンを弾いたのが、今カザルスホールの音楽監督をしヨーロッパを拠点に活躍している今井信子



昭和29年、新しい教室での岡本先生の授業

さんです。70周年記念運動会は小学部として独立してやった最初の運動会でもありました。高3の人たちが「銀波」の音楽に合わせてやっていた英和の運動会の伝統「行進」を真似て、私たちは人文字で70を作ったり、ハチマキをつなげて楓のマークを描いたりしました。

70周年行事の一環として夏季学校は出流山のお寺で行われました。ここは戦時中学童疎開した所で、疎開した人たち（高校生）も参加し一緒に生活しました。この夏季学校のメインは伝道活動でした。いくつかの班に分かれ各班に高校生がつき、村に散り、村の子供たちを集めて紙芝居をしたり讃美歌を教えたりするのです。そのほか、お寺の本堂にずらっと布団を並べて雑魚寝したり、炎天下トラックの荷台に乗って場所の移動をしたりと、この夏季学校は忘れ難い思い出の一つです。

こうして振り返ってみると、新校舎への移転、小学部としての独立、70周年と、小学部の歴史の画期的な時期に在籍し、歴史の1ページをつくっていたのだという思いを強くいたします。

（昭和30年卒業・元小学部教諭）

小学部校舎移転のころ

今村史子

私達が英和の小学部に入学しましたのは、昭和24年の事でした。終戦の混乱も幾分落ち着き、世の中に明るさと活気がもどってきた時代だったと思います。当時小学部は、今の高等部旧校舎小講堂と、同じ棟の1階、2階を使用しておりました。校門は、中、高等部塀添いに曲がり、旧フィリピン大使館石垣の前当りで、門を入った右手は小高くなって古い木々が繁り、小さな私達にとっては「森」の様に、大きく広く感じられました。この「お山」は恰好の遊び場で、「お山」を切り離して当時の思い出を語る事は出来ない程です。クラスは1学年1クラスで50名程でした。それだけにクラスは1人1人しっかり結ばれ、まとまっていた様に思います。

昭和26年の秋頃、今までにない出来事が起りました。それは、東久邇宮家のお庭にぎんなんを拾いに行く事でした。手に手にバケツを持って、広大な敷地内のぎんなんを拾い集めましたが、その臭い事!「どうしてこんな臭い物を集めなければいけないのかしら。」とうらめしく思いながらも、

昭和26年10月、新校舎用地でのぎんなん拾い

仕方なく鼻をつまみながら集めたぎんなんはバケツに何ばいにもなりました。これを学校に持ち帰り、むしろに広げて一層腐らせ、水できれいに洗ってざるに並べて干します。「こんなものをどうするのかしら」と思っていたある日、お給食に黄色い小さな実が出たのです。何の献立だったかは覚えておりませんが、「自分達で拾って苦労して洗ったぎんなん」が皆の食卓に上った事はとても印象的で、はっきり思い出されるのです。今思えば、この頃東洋英和小学部新校舎用地として、東久邇宮家より譲り受けられたのでしょう。

5年生になった頃、小学部校舎の移転が知らされました。「新校舎が、あのぎんなんを拾ったり落葉を集めたりしたお庭に出来る」というのはとても親しみ深く感じられる一方、5年間皆と一緒に過した教室や校庭、大好きな「お山」と離れるのは何とも寂しく、複雑な気持で一年間過したものです。5年生の終業式が終ると、一人一人自分達の使った机や椅子を背負って、旧校舎から新校舎までの数十メートルの道を往復しました。その様子はさながらありの行列の様だった事でしょう。新校舎を一眼見た時、その斬新な外観と明るい雰囲気に驚かされました。今までの重厚な落ち着いた雰囲気とは対象的なこの校舎は、気持を新にさせるにふさわしいものでした。最高学年になる責任の重さと、新しい教室を始めて使う誇りを、いやが上にも盛り上らせたものです。

この新校舎での最後の一年は、東洋英和女学院70周年の年でもありました。運動会、展覧会、音楽会、クラブ活動の発表会等、数々の記念行事が

行われ、6年生としては大活躍の年になりました。特に、日本青年館で行われた音楽会で、高学年は合唱と合奏をする事になりましたが、5、6年有志によって演奏された、ハイドンの〝おもちゃの交響曲〟は当日のハイライトでした。何ケ月も前から準備し、毎日放課後遅くまで練習した最後の日に、「これは絶対に大変な拍手になるに違いないから、アンコールを用意しましょう。」という事になりました。そこで、第3楽章が終って拍手の間を取り、もう一度第3楽章を演奏するという練習までして、当日に臨んだのです。幕が下りて最後の拍手が止んだ時のあのさわやかな気持、一生懸命にやってなし遂げた後の充実感は今でも心に焼きつき、小学部最後の年の思い出の一つとして、いつまでも私の心から消えない事でしょう。

卒業から三十数年経った今日、未だに昔のままのいちょうの木の下で娘が学び、遊んでいる事を思うと、神の御意志を感じずにはいられません。そして娘に、何か一つでも良い、本当に心に残る様な思い出を作ってほしいと願う今日この頃です。

（昭和30年卒業・小学部4年母）

【参考】 小学部現校舎から巣立った卒業生の人数

年度	1組	2組	合計	備考
昭和29	57		57	1学級
30	42	41	83	（1955）以後2学級
31	41	40	81	
32	42	40	82	
33	42	40	82	
34	45	44	89	
35	43	43	86	（1960）
36	45	45	90	
37	43	44	87	
38	43	43	86	
39	43	44	87	
40	46	44	90	（1965）
41	45	45	90	
42	43	42	85	
43	45	46	91	
44	43	42	85	
45	45	42	87	（1970）

年度	1組	2組	合計	備考
昭和46	44	44	88	
47	40	39	79	
48	40	39	79	
49	41	40	81	
50	40	40	80	（1975）
51	42	41	83	
52	42	41	83	
53	42	43	85	
54	41	41	82	
55	42	41	83	（1980）
56	41	42	83	
57	41	41	82	
58	39	38	77	
59	38	39	77	
60	38	38	76	（1985）
61	38	39	77	
合計	1402	1331	2733	

これだけ多くの卒業生を送り出した校舎も、最近は老朽著しく、新校舎建て替えの必要に迫られている。（編集者）

史料室日誌から

１９８７．１０．２２（木）・静岡英和女学院百年史資料室より平岩千代さん資料について礼状が届く。・基督教保育連盟より問合わせ。Miss A.W.Allen の生年月日～没 １９７３．９．１５、Miss L.Lehmanの １９８７．７．８～没年。・中高部の資料を仕分ける。逐刊記入「母の会だより」、欠号が多い。・東洋英和女学校、東洋英和女学院の年史保存冊数、予備数等を確認、記入、戸棚①におさめる。逐刊記入「東洋英和女学院高等部卒業證書授与式次第」を新たに見つかったものをファイルし、記入（未完）。

１９８７．１０．２９（木）・昭和３０年前後の宗教行事（修養会）の資料（中野登美子氏）をファイル。ＹＷＣＡの資料も少し入っていたのでファイルに追加。・「中学部入学式」次第、「中学部始業式」次第、「高等部入学式・始業式」次第を整理、殆ど無い。「中学部卒業式・修業式」次第を整理、少し。「東洋英和女学院高等部卒業証書授与式」次第ファイル完了。欠が多い。・「あゆみ」フェリス女学院、逐刊記入。

１９８７．11．５（木）・短大からの資料を片付ける。短大資料整理済みのものについて欠号補充依頼をあらためて各部署宛に作成し短大便に託す。・中高部資料を朽木先生持参、仕分ける。・本２冊、カードをとる。

１９８７．11．１９（木）・丸善に注文の品届く。ＶＦ組立て。ＶＦ①の資料半分をＶＦ②に移す。・史料室だより№２９記録、保存、予備、ファイル（２部）、残部配置。・寄贈図書の整理配架。・高橋武子氏のランバレネより上田朝子先生宛の書簡をコピーする。・朽木先生来室、故林つる氏の成績証明書等の資料　（寄贈ノート）が妹さんより寄贈される。

１９８７．１２．３（木）・注文の文具が届きチェック。・寄贈図書（４冊）その他届いたものを整理配架、カード配列。・中高部よりの資料のうち、学年だより、生徒会・生徒会報、楓祭、をファイル（チューブ）する。欠号が多いため逐刊記入はしない。その他の資料（中高部）の分配したものを年順に揃えてファイルの準備をする。

１９８７．１２．１７（木）・小学部より史料室だより残部及び印刷物９月、１０月、１１月分が届き仕分けする。６、７月分が欠のため整理しにくい。・寄贈本その他入ったものの整理、配架。・朽木先生来室、資料持参。

１９８８．１．１４（木）新年初仕事。・小学部母の会の収集資料Ⅰ、Ⅱ－創立９０周年、100周年展示資料、Ⅳ－創立100周年展示資料（パネル７枚）、他に印刷物６月、７月、１２月分が届く。・短大資料「静岡英和の百年」他が届く。・逐刊記入－短大「就職の手引」「オリエンテーション・ウィークプログラム」「学友会活動の手引」。以上は短大より欠号補充が届けられたので大体揃ったため。まだ欠のものもある。

── あとがき ──外崎先生がお元気なうちに、今の小学部校舎が新築された頃の事情を書き止めておいて頂きたいと思い、特集を組みました。甲野先生・今村様にも思い出深い原稿をお寄せ頂き、外崎先生共々感謝いたします。開かれ行く明日の小学部を夢見ながら。　（小学部　木口・野田）